

かぞくのほなし きむら あきこ

第8話 子育てひとくぎり

この春、私の子育ては、ひとくぎりを迎える。28歳、25歳、22歳の三人の子ども達を育ててきた。末っ子が、大学を卒業し、社会人の仲間入りをする。

末っ子は、高校3年生の12月に大学の進学が決まっていた。そして、翌1月には自宅から離れ、長女と一緒に生活を始めた。ちょうど、コロナ感染症が始まった時期で、高校の卒業式も、大学の入学式も参加できずに時間は流れた。最初の2年は、ほぼオンライン授業。3年目によく登校授業が主になった。4年になった6月には就職が内定していた。ほとんど、親に心配をさせない末っ子だった。つかず離れずの生活をしつつ（とは言え、車で10分、距離にして6キロ程度）、私が寂しくなると、誘っては一緒にご飯を食べたりしていた。これからもそれが続くと思いきや、末っ子の赴任先は地方に決まった。転居の準備をしつつ、う・・・む、寂しい。

一番目の子は、高校卒業して大学に進学したものの、前期をもって「自分の道ではない。」と大学を辞めて働きだした。二番目の子は、高校卒業後には、留学をしたいと言ったが、私の資力が足らずに、資金を貯めるために卒業後の留学を保留にした。そのうちに、目指していた語学力は留学をせずとも身につけ、結局留学をせずに就職を果たした。そして、末っ子は、様々な条件をうまく使って大学へ進学した。末っ子自身の努力と、そして上の二人の歩みもあってこそその大学生生活成就だったのではないかと思っている。個人の努力だけではない巡りあわせの持つ運もあっただろう。

28年前、初めて子どもが生まれた時、「いつかは巣立っていくのだから、子どもの人生と自分の人生を混同しないように・・・」などと意識をもって子育てをスタートしたのは、今でもはっきりと覚えている。無我夢中の子育ては、肩に力が入っていたし、今振り返ると、世間一般よりは、厳しい価値観で子ど

もを育てたと思う。それは、子ども達からも思い出として語られる。内容によっては、本当に申し訳ないほど、厳しくしてしまったと感じている。そんな未熟な親であった私に、最大の寛容さをもった三人の子ども達は、優しく育った。

子育て時期には、自分が自由に使える時間やお金もなかった。今は、少々時間や楽しむ程度の経済的な余裕もある。けれども、それらを一人で使いこなす要領が私には足りない。考えてみると、時間やお金は、誰かのために使う方が自分の満足になるのかもしれない。それも、あまり健全とは言えないのか？ふと、「空の巣症候群というやつなのか？」と自覚した。いや、そんなことを言ったら、子ども達に心配をかけてしまうだろう。これからは、それぞれが、大人として、自分を大切に、楽しみながら人生を歩んでいきたい。子育ての時期は生きていくことに必死だった。子ども達には、働く背中しか見せてこなかったような気がする。楽しく、自分のご機嫌を取りながら、のほほんと生きる姿が私には足りない。これからは、楽しくのほほんと、お気楽に軽やかに生きていく姿を子ども達には見せていきたい。

未婚率の上昇や、合計特殊出生率の低下が言われて久しい。結婚や子どもを持つことへの価値観の変化も否めない。多様な生き方が尊重されて良いのだから、一概に結婚や出産についての価値を語ろうとは思わない。ただ、私自身の人生においては、結婚も出産も、そしてできれば避けたかった離婚も含めて、自分の生きてきた歩みに悔いはないし、どの経験も良かったと思える今がある。だから、これからの人生を歩む子ども達にも、自分が良いと思える人生を歩んで欲しいと思っている。例え、結婚しなくても、子どもを持たなくても、又は、その逆に、結婚をすることも、子どもを持つことも、選んだ人生を謳歌して欲しいと思っている。誰のためでもない自分の人生を大切に楽しむことが、あなたの周りの人を幸せにしているのだよ・・・と、子ども達と、私自身に言ってあげよう。

ここからが、人生の第二ラウンド開始！

おわり